

クルト・レヴィンの「生活空間」の構造

山 本 英 治

(一)

社会学においては人間の社会行動の分析が一つの課題となつてゐる。その分析の方法や観点は種々様々であるが、ゲシュタルト心理学者として著名なクルト・レヴィンの思想体系と言われる「場の理論」Field Theory はそれに対する鋭利な分析方法となり得ると思う。この小論の問題意識は飽くまで人間の社会行動の解明にあるが、その分析方法としての「場の理論」について、特に彼が構想したところの「或一定時点における個人の行動を決するところの事態の全体 totality of facts」であるところの「生活空間」life space を中心にして考察を進めようと思う。

一体にゲシュタルト心理学説においては、先ず外界の一定の事態における生活体の心的事象 Mental event 及び行動 behavior の実験的な観察から出発し、それから得た事実にもとづいて生活体の心理的世界の構造を説明しそれによつて人間の行動を説明せんとするものである。そしてレヴィンがこの心理的世界の構造の理論構成として導入した構想が場の理論なのである。この理論にもとづいた心理的世界の構造が数学的なトポロジー Topology の概念や物理学的なヴェクター Vector の概念の対位的な定義方法で表現されている。

彼は最初に生活体の心的な緊張 tension の発生と解消について研究し、次いで人間の意志や行動や情緒の過程についての実験的研究を行い、更には科学方法論に意を用いて、彼特有の条件発生的研究法を説いた。そして実験的研究を進め、人間の力学的心理学を展開した。即ち彼は、行動 (behavior =

B) は人 (person = P) と環境 (environment = E) との函数 (function = F) である、とし次の公式を展開した。

$$B = f(P \cdot E)$$

或は行動は生活空間 (livespace = L. S) と人 (P) との函数であるとして

$$B = f(L. S \cdot P)$$

なる公式で表現されている。更に此の考察をおし進めて場の理論を体系化したのである。アメリカに渡つた後は社会心理学の分野に独特の構想を展開しグループ・ダイナミックスの研究を提起し発展させんとした。

彼は心理学の分野のみならず社会科学全野に対して偉大な貢献をなしたと言われる。カートライトが「クルト・レヴィンは社会科学の発展の重要段階において社会科学の進路を根本的に変化させるような研究した人々のうちの一人である。彼は初期には心理学者としてその分野に大きな寄与をなしたが彼の研究の影響は伝統的な心理学の分野をこえて広く他にまで及んだ」と言つてゐる。レヴィンが「私は社会学において実験を企てる事が可能であると信じてゐる。それは物理学や化学の実験と同じように、科学的な実験とよばれるだけの権利をもつものである。物理的空間ではないとしても実在的な経験的空間のすべての本質的特性を具備し、幾何学や数学の研究者が物理学的空間に拵つてゐるのと同じほどの注意を払うのにふさわしい社会的空間が存在すると私は信じてゐる」と言つて、彼の実験法を巧みに集団生活の複雑な問題に応用させることに成功し、他の社会学者を大いに刺激したのである。即ち彼は具体的なもの、社会行動と社会理論との間に堅固な橋をかけたのである。行動主義の心理学者トールマンは「臨床家として

(1)

山本・クルト・レヴィンの「生活空間」の構造

(2)

のフロイト、実験家としてのレヴィン——この二人は心理学をはじめて現実の個人と現実の社会に適用しうる科学たらしめたことゆえに永く想い出されるであろう」と言っている。

では、彼の思想体系、即ち場の理論は一体いかなる内容を持ち、又どのよう構成されているのであろうか。そしていかに人間行動を解明しているのだろうか。これを次の節において考察して見よう。

註 (1) K. Lewin, Principles of Topological Psychology, p. 126

(2) *ibid.*,

(3) K. Lewin, The Conceptual Representation and Measurement of Psychological forces,

(4) K. Lewin, Vortatz, Wille und Bedirfnis, 1926

(5) K. Lewin, Gesetz und Experiment, 1926

(9) K. Lewin, A Dynamic Theory of personality, 1935

(7) K. Lewin, Psycho-Sociological Problems of a Minority Group, 1935
K. Lewin, Some Social-Psychological Differences Between the United States and Germany, 1936, etc.

(8) レヴィンは1945年にマサチューセッツ工科大学に招かれ、グループ・ダイナミクス研究センターを創設し、その初代所長となつた。この研究センターはグループ・ダイナミクスの研究とその社会生活の応用を目的とし、コネチカット州におけるコミュニティー・リーダーの訓練のためのワーク・ショップや集団発達訓練ラボラトリ等を開設し、コミュニティーにおける人間関係の研究とリーダーシップの技能の訓練とに多大の貢献をした。

(9) K. Lewin, Field Theory in Social Science, Foreword, vii.

(10) K. Lewin, Resolving Social Conflicts 末永俊郎訳「社会的葛藤の解決」九四頁

(11) *ibid.*,

(一)

この節ではレヴィンの思想体系のアウト・ラインを述べて場の理論について考究しようと思う。

一般に彼の思想体系は場の理論と名づけられているが、これについて彼は「場の理論とは何か？ 一種の一般的な理論であらうか？ ……場の理論は普通の感覚では殆んどセオリーと呼ばれることが出来ない。…場の理論は多分一つの方法として、即ち因果関係 Causal relation の分析の、そして科学的な構成体 scientific constructs を組みたてることの一つの方法として最も良く特徴づけることが出来るのである。この因果関係の分析の方法は種々の変化の諸条件の「性質」 nature を或る一般的な論述の仕方で見出し得るのである」と言う。即ち場の理論とは因果関係の分析方法であり、又行動の法則を説明するために構成される心理学世界——科学的構成——の構成方法なのである。

では、この場の理論は一体いかなる科学的方法論のもとに考え出されたのであろうか。それは、いわゆる条件発生的研究法 *Konditionell-genetische Methode* によく表われているのである。条件発生的法則の探究というのは個々の過程をその際の状況の総体から導き出す操作、即ちその条件状況に依存する過程の特性を力学的な概念でもって構成してゆく方法なのである。換言すれば、組織的に条件変化を行つて、いかなる条件のもとにいかなる心的事象が起るかについて両者の力学的依存関係を明確にし、その科学的理論や法則を得ようとする研究方法なのである。そしてその結果得られたものが条件発生型についての法則である。即ち歴史的・地理的因子を出来るだけ排除した純粹なケースに対して種々様な条件変化を加え、そこに発生した心的事象の比較対照により発生型の型を法則的にとらえることである。この科学的方法論は物理学におけるアリストテレス的な構想からガレリオ的構想への進展から類推して展開されたものである。彼は次のように述べている、「アリストテレス的物理学とガレリオ以後のその間の最も特徴ある相違が心理学者の科学的標準の上に大きな影響を及ぼしている」と。アリストテレス的構想は共通の特質を抽象して来て定義された類概念、言わば抽象的な分類 abstract classification を設定し、事象の規則性 *regularity* と頻度 *frequency* によつて定義される法則とそうでない例外的なものを設け、そしてこの事象

	アリストテレス的構想	ガリレオ的構想
1. 規則的なものはたびたび起るものは一度だけのものは	法則的である 法則的である 偶然である	法則的である 法則的である 法則的である
2. 法則性の構準は	規則性、頻度である	必要とされない
3. 歴史的に発生するところの事例にとつて共通であるところのものは	そのものの本質のあらわれである	偶然の出来事か或は歴史的に条件づけられたにすぎない。

の起源は歴史性に求められ、地理的に規定されるとしている。⁽⁴⁾これに対してガレリオ及びその以後の構想においては類概念より系列概念への移行が示される。即ち類概念に代つて函数的に考えられる条件発生的な概念 *conditional-genetic concepts* が使用される。そして全状況は法則的に支配される一つの事態として等質化されたもの *homogenization* とし、法則と例外の区分が消失すると言ふ。⁽⁵⁾そしてこのガレリオ以後の物理学がアリストテレス的な物理学の思考方法を克服しようと努力しているのと同様の状況が心理学の分野においても見られる、と彼は言う。⁽⁶⁾即ちアリストテレスの構想による類概念、歴史的、地理的概念にかわつて条件発生的概念を使用し、歴史的因果 *historical causality* のかわりに体系的因果 *systematic causality* にもとづいて法則をつくるのであり、これが結局力学的構想をとることによつて具体化されるのである。⁽⁶⁾次にアリストテレスの構想とガレリオの構想との間の方法論的相違の比較を簡明にするために、法則性 *lawfulness* の問題を一例として表で示して見る。⁽⁶⁾

この表を見れば両構想の間の相違が容易に判るようにガレリオの構想においては全現象が歴史的発生によつて体系づけられるのではなくして条件の発生によつて体系づけられるのである。

以上のごとき科学方法論によつて展開される彼の場の理論を要約するならば、それは生活活の示す心理的事

象や行動をその際の心理的全事態との関係から導き出そうとするものである。即ち「もしも行動 *behavior* 或は心的事象 *mental event* を B であらわし、人を含む全状況 *the whole situation* を S であらわすならば、B は S の函数 *function* として取りあつかわれることが出来る。即ち次の公式が成立するのである。

$$B = f(S)^{(7)}$$

これについて今少し彼の説明概念を利用して考察を進めてみよう。

行動の法則を明らかにするために行動を一定の状況に結びつけるための媒介的な存在、即ち行動を一定の状況との関係において導き出すことのできる科学的構成体 *scientific constructs* が必要になるのであつて、これが心理学の實在と言われるものである。行動についての観察事実にもとづいて、このような心理学の實在の世界を構成し、それによつて行動を説明すると言ふことが彼の理論構成の方法なのである。レヴィンにおいてはこの心理学の實在の世界の構成方法是对位的定義 *coordinate definition* にもとづいて行われている。即ちそれは条件発生的に探究された経験事実に対し、それを適切に表現し得るような数学的概念を対位する *coordinate* ののである。この対位する数学的概念とは前述した如くトポロジーの概念であり、ヴェクターの概念である。そしてこれらの形式数学的概念でもつて構成される心理学の實在の世界を彼は生活空間 *life space* と表現している。即ち彼は「心理学においてこの全体的な状況 *the whole situation* はその人 (P) と彼の環境 (E) とに区分することによつて記述し得る。凡ゆる心理学的事象 *every psychological event* は人の状況と同時に点における環境に依存している。かくして次の公式を得るのである。

$$B = f(S) \quad \text{同様に} \quad B = f(P \cdot E)$$

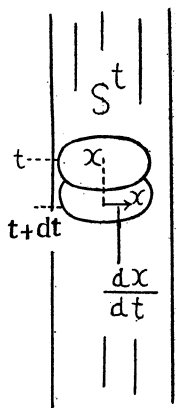
……普通には状況 *situation* なる言葉は環境を意味して使用されている。私は或る瞬間における個人の行動を決する事実の総体 *totality of facts* を指示するために心理学上の生活空間 *life space* なる言葉を使用する⁽⁸⁾と言ふ。そして「人間の行動或は心理学的事象が生活空間から抽き出されるとするな

らば、生活空間を『起り得べき事象の総体』totality of possible eventsとして特徴づけねばならない」と言うようにこれを規定している。ガレリオ的構想にたつ彼の心理学においては生活空間が人と環境との体制化された全体として考えられており、これがゲシュタルト構造をもっている場に外ならないのである。即ちゲシュタルト心理学はその場の全体の過程の力の配分関係にもとずき力学的平衡のとれる構造を終局として、部分過程は全体的過程のなかで体制化される、と言う原理にたつており、ゲシュタルト Gestalt とはその部分又は部分間の関係からは導き出すことのできない特別な性質をもつた体制化された全体を意味している。心理学的事変とか行動を生み出す一定の場と言うものは、人とか環境が一つ一つの要素に分離されないで一体となつて体制化され、そこにおける一定の行動を生み出す一つの環境なのである。そしてそこに生起する行動は場の力の力学的構成いかんによつて決定されるのである。そして彼は「ただ現在の事象のみが現在の事象に影響をあたえることが出来る。過去或は未来の心理的事象は現在の事象に影響をあたえることが出来ない」と言う。即ちここに同時性の原理 principle of contemporaneity を説くのである。そしてこの原理においては一定の場は単なる一瞬時点における生活空間ではないと言う。それは「事象の経過 courses of events が状況——これが瞬時的断面 Momentary sections として考えられている——の連絡 series として表わされ、……場の構造は或時間の間は充分に一定しつづけるものである。……あたえられた時点における変化の方向 direction と速度 Velocity を決定するために、この一つの時間的断面を長さ extension のない瞬間としてではなく、微分的時間の断面 differential time section とし考えねばならぬ」のである。要するに同時性の原理とは「具体的に存在するところのもののみが効果をもつことが出来る。現在の瞬間において過去も未来も存在しないから、それは現在においては効果をもつことが出来ない。現在の事象のみが現在の事象に影響をあたえることが出来る。それ故に生活空間の構成においては同時的であるところのもののみを考えれば良い」と言うことである。一定時間 (t) における一定のゲ

シュタルト構造 (g) をもつた生活空間(これをいまかりに L.S.g.t とする) はそれに相通する生活体の一定の心理的事変或は行動 (Bg.t) のみを発生せしめ、それ以外の Bg.t を生ぜしめない。そしてこの Bg.t はその場における g の変化——場の力学的構造の変動——と t の経過によつてのみ Bg.t となり得ることからして、Bg.t は L.S.g.t と函数関係にあると言得ると思う。そこで次の公式が成立する。

$$B = f(L.S.g.t)$$

これについてレヴィンは次のように言っている。「心理学的な場における或行動あるいはその変動と言うものはその時間 at that time における心理学的な場のみ依存している。」或は「凡ゆる行動(活動・思考すること・要求すること・努力すること・価値づけること・目的を達成すること等)は、あたえられた時間の単位 a given unit of time における場の或状態の変化 $\left(\frac{dx}{dt}\right)$ として考えられる」云々。この $\left(\frac{dx}{dt}\right)$ については次のように言う。「物理学的世界において、点 x の変化は常に $\left(\frac{dx}{dt}\right)$ として、即ち微分的な時程 differential time-period, dt の間における x の位置の微分的な変化 differential change として考えられている。場の理論においては時間における変化 $\frac{dx}{dt}$ はその時間 t における状況 S_t にも依存していると言い得るのである。(次の図を参照)



(註) $\frac{dx}{dt}$ は x の速度を示す。S は閉ざされた。体系 closed system である。

そしてここに次の公式が成立する。

$$\frac{dx}{dt} = F(S_t)$$

このようにレヴィンは人間行動を分析するにあたり、時間を微分的時程と

して取扱ひ、場の構造を微分的時程の間は閉ざされた体系として一定にして考察しているが、この点は実験心理学の域を脱していないと言ふ事は免れない。現実の人間行動はこのように微分的に考察されうるものではない。このように対象をスタテックに分析すると言ふ方法は形式的な考究態度である。社会科学的方法としては飽くまでも問題をダイナミックに分析することが必要なのである。

生活体の行動を生み出すところの一定時程における一定のゲンユタルト構造をもつ生活空間と言ふものは、そのみが他の時間と他の空間から切り離されたユニットではなくして、より広大な生活体の行動空間と行動時間との連続なのである。即ち一つの生活空間は他の行動空間や行動時間と立体的に連つてゐるのである。したがつてその場における生活体の行動は一定時点の一定の構造をもつその場のみによつて規定されるものではなくして、過去から現在、そして未来へと連続する時間的連続と一つの場Sと他の場S_rとの複合、更にはその場Sがその外的条件たる自然的社会的環境に包括されてゐると言ふごとく立体的構造によつても影響を受けてゐると考えたい。彼が後に社会心理学やグループ・ダイナミックスの研究に入つた時にも矢張りその対象分析の方法はスタテックな実験心理学の域を脱し得なかつた。と言ふのは彼がここにおいても社会的な場を一定時程の一定構造に静止させて観察したからである。そして社会的場の特性はその場の大きさよりもそのパターンにより多く本質的にかかわると考え、このパターンを適用すれば小さい集団でもその構造を究めることが出来るとし、こうした小集団を実験的に設けるいろいろの問題を実験的に考究する仕事をはじめたのであるが、これを見ても彼の方法が静的であることが判る。

彼においては社会環境は生活空間の外側に存在する領域 region としてとらえられ、これが個人に対して影響力をもつ場合は物理的空間とともに生活空間の境界 Boundary に触れることのみによるとされている。そして彼の研究にはこの外的条件になる社会的環境と行動の場としての生活空間との間の理論的つながりは明確には問われていない。トールマンは、レヴィンの微

山本・クルト・レヴィンの「生活空間」の構造

視的 Microscopic な環境の分析に対して、巨視的な macroscopic な環境条件と行動との機能的結合を説いて一層ふかい科学的見解を説いた。そしてレヴィンは現在の行動Bは現在の状況Sのみによつて影響されると考えたが、これに対してトールマンは、この状況Sを独立変数 independent variable と呼び、生活体の行動Bを従属変数 dependent variable⁽¹⁾ と言ひ、更に行動をその状況にむすびつける媒介変数 intervening variable——他人によつて直接に観察されることのできないものであつて、行動その状況との関係から導き出される科学的構成体として心理学的に実在すると考えられるもの——を構想した。即ち従属変数である行動と媒介変数との函数を定め、次に独立変数である状況と媒介変数との函数関係を決定すると言ふ理論構成をおこなつて、行動は状況のみならずその場に直接観察されない心理学的実在によつても影響をうけるとした。この直接に観察されない心理学的実在、即ち媒介変数は生活体及び環境における時間的空間的な立体的関係のうちにとらえられる。行動が現在の状況のみならず、かかる心理学的実在によつても影響されると考えるところにはじめて問題対象がダイナミックに分析され得ると思ふ。そして生活体及び環境の立体的関係と言ふ観点に立つならば、内的な生活空間はこの立体的関係をもつ生活体Pと外的環境Oの函数関係と考えねばならないと思ふ。そしてこの場合における人間の行動は単なる反応的な行動 Behavior ではなくして過去と未来を想起洞察し、行動空間の有機的關係を分析判断する主体的な行動 conduct⁽²⁾ C として考えたい。したがつてこの主体的行動CはPとOEとの函数関係にあるLSの函数として考えられる。そこで次のように言ひあらわすことも出来るであらう。

$$L.S = f(P, O.E)$$

$$C = f(f(P, O.E))$$

以上のごとく考察するならば、レヴィンにおける問題点は生活空間を一定時程における一定構造としてスタテックに観察し分析したことにある。

しかし彼が個人心理学の分野から脱け出て問題対象を集団に求め、社会心理学及びグループ・ダイナミックスへと考究を進め、社会科学に貢献した点

は認めねばならない。

即ち彼は理論心理学において検討された概念体系でもって個人の生活空間より移つて社会的な場の力学的構成及び生活体の示す社会行動とその場の構造との因果関係を説こうとし、小集団を実験的に設定し、いろいろの問題を実験的に考究する仕事をおこなつたのである。それについての報告が「*Solving Social Conflicts ; Selected Papers on Group Dynamics, 1948*」にありわれている。これには文化の差異と再教育の可能性、家族や工場労働者間におけるような対面集団の葛藤、或は少数集団の特殊問題に含まれている数々の実践問題についての所論が収められている。即ち社会的葛藤の性質とその原因の分析、それを解決することができるような数々のテクニクを探究しようとしたのである。要するに彼は明確な理論的観点にたつて人間行動の法則と力学とを終始一貫して探究し理論を行動に結びつけようとしたのである。

- 註
- (1) K. Lewin, *Field Theory in Social Science*, p. 45
 - (2) K. Lewin, *A Dynamic Theory of Personality*, P. 2
 - (3) *ibid.*, pp. 4—9
 - (4) *ibid.*, pp. 9—13
 - (5) *ibid.*, P. 13
 - (6) *ibid.*, pp. 13—42
 - (7) *ibid.*, p. 26 頁以下 K. Lewin, *Principles of Topological Psychology*, pp. 9—10
 - (8) K. Lewin, *Principles of Topological Psychology*, p. 11
 - (9) *ibid.*, p. 12
 - (10) *ibid.*, P. 14
 - (11) *ibid.*, p. 34
 - (12) *ibid.*, p. 35
 - (13) *ibid.*, pp. 34—35
 - (14) K. Lewin, *Field Theory in Social Science*, p. 45
 - (15) *ibid.*, Foreword, xi

- (16) *ibid.*, pp. 46—47
- (17) C・L・ハルは独立変数に対して刺激変数、従属変数に対して反応変数と名づけている。

(三)

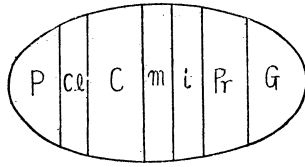
次にこの節においては彼がいかに生活空間を構成したかを彼の説明概念をたどりながら考察して見よう。

先ず生活空間の構成概念としてとりあげられた形式的数学のトポロジーの概念やヴェクターの概念に至る前段階としての意図・意志、および要求についての彼の研究を考察して見よう。即ちそれは一定の場における生活体の側における要求 *Need* と緊張 *tension* の発生と環境の側における誘発性 *valence* の問題である。

生活体の意志動作を支配する力がいかに作用するかはその環境、即ち領域 *region* のゲシュタルト構造の強弱の程度に依存している。そしてかかる力学的構造をもっている一定の領域から生活体が刺激をうけて活動をはじめたとすれば、生活体内に一つの要求が発生したと言うことになる。この要求は種々様々であつて、生活体の基本的な要求であることもあれば、偶然的な一般的要求であることもある。そして生活体の内部にかかる要求が生じることによつてこれを満たそうとして一つの緊張、即ち心的なエネルギーがおこることになる。ところが一方では生活体はこの緊張を解消しようとする衝動を有し、このエネルギーが解放されない限り不安定を保つ。この緊張は生活体の運動体系と連結することによつてそのエネルギーを解放するのであるが、このように生活体に緊張が生ずると、その要求の目標となる対象や一定環境領域には周囲のものをそれに引きつけ、或は反撥する性質が賦与される。これを誘発性と言うのであるが環境へ引きつけるそれを積極的誘発性 *Positive valence* 反対方向のそれを消極的誘発性 *Negative valence* と呼んでゐる。そして環境領域に誘発性が成立するとそこに場の力が生じ、緊張や誘発性の強弱によつてその力の速度が決まり、又誘発性の積極性が消極性によつて

その方向が定まる。ここに生活体がその心的エネルギーを解放するために誘発対象に到達、或は逃避しようとして移動 locomotion を行う。この場合生活体の移動は必ずしも身体的動作の変化を言うものではなく、言語動作としての社会的な移動、あるいはトポロジー心理学においては思考活動として概念環境の移動までも含めている。即ち彼は次のように言う。「身体的な移動と呼ぶことが出来ないところの心理学的な場における真実の移動もある。例えば、十六歳の少年(P)は医者になろうと言う目標をもっている。この目標 Goal (G) にいたる通路 path は次の一定の段階を経て行く。大学入学試験(ce)、大学(c)、医科大学(m)、内務期間(i)、行動の達成(pr)。

この少年は大学については明確な概念をもっているかも知れない。医科大学と次の段階は多少、分別し得ない領域 undifferentiated region を構成するかも知れない。そしてそれを超えたところに医者になると言う目標が存在している。彼がこの大学入学試験に合格した時は、彼は目標への路を一步前進したことになる。この行動は決して身体的なものではない。それにもかかわらずそれは真の移動即ち準社会的な生活空間 quasi-social life space における位置の真の変化なのである。……



「医者にならんとしている少年の位置」

P=人, G=目標, ce=大学入学試験,

c=大学, m=医科大学,

i=内務期間, pr=行動の達成

彼の位置における変化の真実性は以前に存在していなかったところの多くの事柄が今や彼の到達範囲内に在ると言うことを考える時により明確となつて来る。……彼の時間は以前より以上に多くの彼の支配下にある。……又会

話によつて他の人に接近することは心理学的に言つて間違いなく社会的な移動のいま一つの例である。——それが身体的な運動とつながりが無いとして。……更に又心理学的に準概念的場 quasi-conceptual fields における本當の移動もあり得る。人が数学の問題を勉強する。最初はそれは不明確な構造のわからぬ領域 unclear, unstructured region として存在している。終には特別な通路によつて問題の解決に近づくかも知れない。この思考における過程は心理学的な真の事象なのである。」そして実験によれば、ひとつの意図によつて成立した緊張は意図動作の完了するまで止まぬ力の体系として持続するものである。即ち要求がその誘発性を賦与された対象に到達し得ない、対象から逃避し得ない場合は、他の何等かの方法によつてその心的エネルギーを解放せんとして行動すると言うことである。

以上のようにして彼は一定の場における生活体の行動を考察したのであるが、更に高度の法則性と斉一性をもつた体系としての場の理論を樹立し、生活空間を構成するために力学的概念を経験的事実に対位せしめ、トポロジー概念やヴェクター概念を導入したのである。しかしここで問題とするのは生活体における要求の発生と領域の側における誘発性の賦与との関係についてである。即ち要求は一定の刺激によつて生起すると言うが、ではこの刺激はいかにして起るのであるか? この刺激→要求→誘発性と考えることが既に疑問である。これは矢張り生活体の要求と生活体の対象としての生活空間における誘発性は相互作用的連関にあると考へた方がよいと思う。即ち領域の側に生活体に要求を生ぜしめるような、即ち誘発性の原初形態となるようなものが存在していて、それが生活体の運動体系を通すことにより知覚体系を機能せしめて要求を発生させると、その領域における誘発性の原初形態はここに誘発性として生活体に働きかけるのであると思う。

次に生活空間がいかに形式数学の概念を適用して説明されているかを見よう。

まず観察事実とそれに対位する概念との間には常に一義的な関係がたもたれていなければならないと言う。条件発生的に探究された経験事実に対しそ

れを適切に表現し得るような数学的概念を対位するのであるが、その場合に対位されるトポロジ概念とは量的測定と関係なく空間関係を取り扱う幾何学の一部門であり、ヴェクター概念とは一般に大きさと方向を有する量を言う。そしてこれを図示するに大きさに比例する線分をその方向に引き、かつ方向の正負を表わすために一端に矢を附したものである。

実際の研究にあつてはトポロジとヴェクターの両方の概念が併用されるのであるが、その場合トポロジ心理学とは心理学的事象の生起する場、即ちレヴィンの概念で述べれば生活空間の構造を叙述するもの、更に言うならば「その場においていかなる事象或は行動が可能であり、不可能であるか」と言う場の規定を表わすものであり、これに対してヴェクター心理学とは「実際にそこにかなる事象や行動がおこるか」を表現するものである。

そこで第一にトポロジ心理学について述べるならば、先ず心理学的領域の決定は、その質的特性 qualitative properties と領域のトポロジ的関連か、或は他の領域に対する境界 boundary か、或は自分自身の境界による。更には相異なる地点を関係づける心理的な過程、特に移動或は伝達によつて定まるのである。移動とは位置の変化であり、領域構造の変化として考えられることも出来る。移動する領域は他の領域の一部となる。そして移動が実行され得るか得ないかは通路(矢)の有無によつてあらわされる。この通路は場の中における生活体の位置の変化を意味する。更には領域には移動に対して抵抗を示すか、或は誘発性をもつかなどのいろいろな力学的特性が規定され、また対象も物体か、生物か、弾性 plasticity をもつか、流動性 fluidity をもつかなどが決められる。また領域か物体か、媒質かという規定は環境の性質として重要な意味をもつものであつて、領域のなかを通つて移動し得る場合には、それは媒質としての性質をもち、物体はそれを拒む性質をもつ。更には境界地帯 boundary zone のなかでも移動に対して抵抗をあたえるところのものは障害 barrier として規定される。この抵抗の程度は次の三種のものがある。(1)は移動の種類によつて、(2)は移動の種々な方向によつて、そして(3)は障壁の種々な地点によるものである。ところで一方生

活体自身もまた生活空間における一領域として考えられるが、これについての要求と緊張の発生についての考察は前述のとおりである。個人の領域においてはその基本的力学的操作として移動を用いることが出来ない。と言うのは、人の領域はそのある部分領域から他の部分領域へあるものを移動させ得るような媒質とみることができないからである。それでその部分領域の境界や相互の関係を規定するには一定の領域が他の領域に力学的に依存している程度を測ることによつて行われる。そして人の構造は(1)運動・知覚層 Motor-perceptual stratum (2)内的な層 inner-personal stratum の二つに分たれこの運動・知覚層は内的領域と環境との間の境界地帯となるものである。知覚は対象やその変化を認識する機能をつかさどり、環境の変化が人の内部構造に変化をもたらす通路にあたる。運動体系は人の内部が環境へ作用するときの実行機能をつかさどり、知覚体系と逆方向に人の内部より環境への通路にあたるものである。一定の生活空間においてかかる構造をもつた生活体に要求が発生し、環境の例に誘発性が賦与されると、そこには一定の場の力が生ずる。この場の力が方向を有するヴェクターであつて、これによつて人は移動を起すのである。

このようにして人のトポロジの概念はヴェクターの概念をまつてはじめて理論的完成をみるのである。即ちトポロジの概念のみでは生活体の行動の方向性についての説明概念としては不十分なのである。

移動の方向性の問題は行動そのもののもつ性格として重要なのである。この方向性はホドロジ hodology の概念でもつて説明される。即ち任意の一点より他の任意の一点にいたる方向やその距離の表現が各種の生活空間の構造について考察され、また通路が二つ以上可能な場合には、そのなかのひとつがある特性によつて他よりも有利な路として決定されるのである。次に心理学的力の規定がヴェクターの概念、即ちその力に強さと方向と着力点をそなえる概念で対位されるのである。

以上のようにトポロジの概念とヴェクターの概念を併用することによつ

て生活空間は一步一步構成されてゆくのである。そして彼はこの理論体系でもつてグループ・ダイナミックスの実験的研究を行い、現実における人間の社会行動を分析せんとした。彼の理論構成には若干の疑問があるにしても、精密な自然科学的方法でもつて理論を体系化した点は正に異色のあることであり、これ以上の研究は他の機会にゆずりたいと思う。

註 (1) K. Lewin, *Vorsatz, Wille und Bedirfnis*, 1926

(2) K. Lewin, *Principles of Topological Psychology*, p. 174

(3) *ibid.*, pp. 48—50

(4) セガルニックの研究「完了動作と未完動作の把握」一九二七年、或はオープンアンキナの「中断動作の再開始の傾向」一九二八年、又はマラーの「種々の実在度における代償動作」一九三三年及びデンボアの「力学的問題としての怒り」一九三一年等の諸実験を言う。

(5) *ibid.*, p. 85

(6) *ibid.*, p. 85

(7) *ibid.*, p. 216

(8) *ibid.*, p. 216

(9) *ibid.*, p. 166 「我々は人を生活空間の内に結びつけられた、そして区別し得ない領域、或は地点として考えて来た。しかしかかる表現は最初の間見当として間に合せることが出来たので、本当には人は全く生活空間と同質の統一体ではなくして、高度に区別し得る客体なのである」と言っている。

(10) *ibid.*, p. 216

(11) *ibid.*, pp. 166—192a